

「コロナの中で」⑤ 「コロナ禍で問われる共生」 〜ひたすらなるつながりのために、学びを止めない〜 天王寺区 「気づけるランド」開催 市・区社協 災害対策本部設置訓練・ 災害ボランティアセンター開設訓練 ③ ③ ②	〈特集〉当事者・家族にとつての「つながり」に向けて ・「ひきこもり」等の支援について考える協働職員座談会レポート ・「できるだけ早い時期にこどもの可能性を広げたい」 NPO法人みらいず2 ④ ⑤ ⑥	市社協 3年間の取組みを総括して「第2期」推進計画へ ⑦ こんなことやっています！私たちの施設から！ 社会福祉法人スワンにわ「こころのんき」に、からだ元気に！ ⑧
--	---	---

大阪の 社会福祉

2021.2

789

The social welfare
in OSAKA

社会福祉 大阪市社会福祉協議会

<http://www.osaka-sishakyo.jp>

今回は、大阪市ボランティア・市民活動センターの上野谷加代子所長（同志社大学名誉教授）に話をうかがった（前列左から2人目）。写真は、インタビュー後にセンター職員と共に撮影。

今月の
コロナの中で

市社協
区社協

一人ひとりにとつての
つながりを

大阪府下に、1月14日、二度目の緊急事態宣言が発令された。地域福祉活動者にとつて、とまどい、葛藤した一度目とは違うのは、この間に仲間とともに、考え、話し合い、試し、積み重ねた経験があることだ。

今号は、特集「当事者・家族にとつての『つながり』」に向き合う」として、区社協職員の座談会（4、5面）、こども食堂や学習支援などでもつながる場を運営するNPO（6面）を紹介する。

HB

コロナで自宅に閉じ込められる日々、何かしなくてはと、難しいジグソーパズルを買った。それも千ピース

▼これで半分退屈がしのげると思ったのだが、難しすぎてやる気が萎えてくる。気分を変えするため、一面の雪化粧を見ようと、東海道線を北へ向かった。米原まで行ったけれど、雪は全くない。さらに雪を求めて、北陸線に乗り変えたが、近江塩津で行き止まり。そこでやっと一面の雪景色に出会えた▼これをジグソーにしたら難いだろうなと思いつきながら、ホームに積もった雪で雪だるまを作ったり、向かいのホームにぶら下がったつららを雪玉で落としたり、楽しく遊んでいたのだが、そこから先に行く列車も戻る列車も来ない。ホームには尋ねる人もいない。時刻表の時間を30分も過ぎているのに列車は来ない▼コロナの時代、行方が分からないのも予定が立たないのも普通のこと。焦らず、流れに身を委ねることも必要だと、ひたすら雪と遊んだ。家に帰ってジグソーに向かったら、その後3日でパズルは完成した▼歌人ではないが、1月13日はパズル完成記念日で、コロナに負けない記念日になった。（石）

コロナの中で⑤

このコーナーでは

新型コロナウイルスの影響下において地域福祉に関わるさまざまな「人」に焦点を当てて、インタビューを通して、その人ならではのストーリーや思いに迫ります。

実践とともに歩んだ 研究者生活

大阪市立大学で社会福祉を学んだ上野谷加代子所長。研究者になってからは、子育て



うえのやかよこ 所長
上野谷加代子

プロフィール：1974年、大阪市立大学大学院修士課程修了。常磐会短期大学、桃山学院大学、同志社大学で約45年に渡り教鞭を取る。昨春、同志社大学名誉教授に就任。日本地域福祉学会、日本福祉教育・ボランティア学習学会等の会長職を歴任し、現在、大阪市ボランティア・市民活動センター所長。『共生社会創造におけるソーシャルワークの役割』(2020)など著書多数。自他ともに認める「社会福祉実践大好き研究者」。

と研究を両立し、多忙な中でも、年1本は論文を書くことを自身に課し、日本の地域福祉研究において顕著な成果を残している。「1979年に、在宅寝たきりの高齢者の訪問ケアについて、看護師とソーシャルワーカーの連携を分析しました。事例を集めるために、地域を回って、一軒一軒訪問して：昔から、そういうやり方が好きでしたね。」2020年3月、上野谷所長は大学を退職した。2月末の最終講義には、全国から上野谷所長を慕う人たちが聴講に訪れ、華々しく送り出された。まもなく、新型コロナウイルスが世界中で猛威を振るい、4月には1回目の緊急事態宣言が出された。

突きつけられた 差別・偏見が残る現実



市・区社協の若手職員学習会でも講師を務める(画面左上)。今年度はオンラインで開催した

現在、大阪市ボランティア・市民活動センターの上野谷所長に、感染が拡大する中で、最初に考えたことを聞いてみた。「これは問われる、と思いましたがね——これまでの人類の歩みやおこなってきた営みを、新型コロナウイルスによって問われると感じたそう。

そして、コロナ禍で、地域社会の中で「差別」や「偏見」が解消されていないことを突き付けられた。福祉教育に力を注いだ分、そのショックは大きかった。

そんな中でも、できることを続ける。全国区で活躍する上野谷所長は、あるときは講演会の講師として、あるときは福祉専門職向け研修の総合プロデューサーとして、滋賀県、長野県、栃木県などの学び

コロナ禍で問われる共生 —ひたすらなるつながりのために、学びを止めない—

と実践の場へ赴いた。これはコロナ禍でも変わらなかった。「人が好き」という上野谷所長は、退職前から一貫して「福祉人づくり」とりわけ専門職の養成に力を入れている。「住民が力を発揮するには、住民に任せるだけでは難しい。一生懸命活動をしていても、ときに住民同士の間で『排除』が起こることもある。だからこそ、知識と技術、価値・倫理に加えて、生活課題を解決する方法を持つソーシャルワーカーを育てることにこだわっている」。コロナ禍でも学びを止めない。研修は「できないじゃないかと、どうやってするか」と力強く語った。

「助けられ上手」になることから

「不要不急って何でしょうね？暮らし人の視点に立つと、要らないものなんて何もなし」と上野谷所長。この状況下で、地域の活動に関わる住民と専門職、それぞれに戸惑いがあるが、「そこは分けて考えた方がいい」と語ってくれた。「コロナ禍で、地域住民やボランティアが集まることをどう判断するかということ、専門職として事業をどのようなおこなうかは別問題。医療の

専門家からも学びながら「感染しないように活動するにはどうすればいいか」を具体的にイメージできるように示すこと。住民の不安も配慮しつつ、正しく恐れ、工夫しながら粛々とできることをやるという覚悟を持つてほしいと思います。」

上野谷所長は「助け上手・助けられ上手」という言葉をモットーにしている。「人間ひとりでは何もできないことを実感することが大事。人に頼んだり、教えてもらったたりすることの繰り返しで、関係が生まれ、地域共生社会が紡がれていきます。コロナ禍では、できることをいろいろと試しながら、今まではできなかった変化を起こす機会にしてほしい」。

先行きが不透明な中、一生懸命な人たちに、エールを送る上野谷所長。

「助けられ上手になって欲しい。ひたすらなるつながりのために」



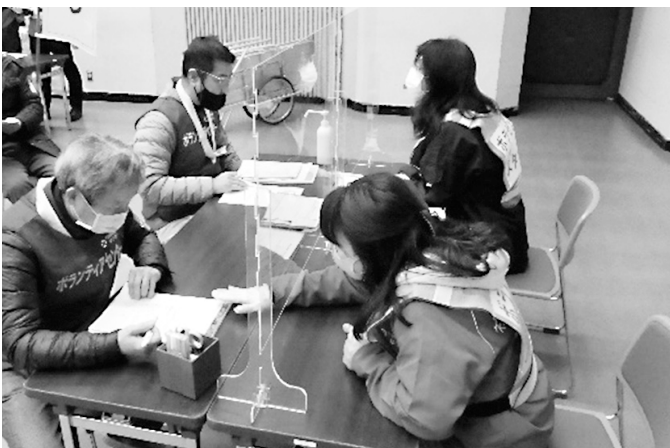
10月の赤い羽根共同募金街頭募金では、先頭に立って募金者に声をかけ、お礼を伝えた(中央)

「気づけるランド」開催

「コロナ禍での災害ボランティアについて考える」

天王寺区社協では、平成29年度から災害時に自分自身や家族・要配慮者を含む近隣の方が困ることに気づき、平時から考えておくこと・つながりをもつことの大切さを学ぶ講座「気づけるランド」を開催している。

今回は、災害ボランティアセンター（以下、災害VC）の機能を知ることにより、地域の早期復興につなげてもらうため、12月26日に天王寺区民センターで災害VC体験を開催した。



アクリル板の設置等、感染対策を実施

の黒田和伸さんから、近年発生している災害の状況や災害ボランティア活動についての話があり、特にコロナ禍における地元の災害ボランティアの重要性が強調された。

その後、参加者は災害VCの役割を実際に体験を通して学んだ。区在宅サービスセンター、老人福祉センター、大阪国際交流センターを災害ボランティア活動先に見立てて訪問し、段ボールベッドの組立て等、災害時に役立つ体験

を実施。大阪国際交流センターでは、災害時におけるセンターの機能や外国につながる市民の防災意識、課題等の説明があり、参加者は、生活を通じて外国につながる市民に対して感じていることや、協力体制について意見を交わした。

最後に体験を振り返り、「自分は避難所運営に携わることになるが、避難所と災害VCの協働を考える機会になった」「一度だけでは覚えられないので、今日のような体験をメニューに変えて何度も企画してほしい」など、今後の活動や企画につながる熱心な意見が出された。



参加者による段ボールベッド組み立て体験

災害対策本部設置訓練・
災害ボランティアセンター開設訓練

市社協と区社協合同による「災害対策本部設置訓練及び災害ボランティアセンター開設訓練」が12月17日に開催され、市・区社協の416人の職員が参加した。

今回の訓練では、発災から3日間の対応を想定し、はじめて全市一斉に災害ボランティアセンターの開設訓練をおこなった。また、被害状況の情報収集

にLINEを活用したり、臨時事務局長会や災害ボランティアセンター長会議をオンラインで開催したりするなど、新型コロナウイルス感染症拡大によってオンラインツールの活用が進んでいることも踏まえた実施内容となった。

訓練を通じて、「事務所内を整理整頓して、落下物などの危険を回避するとともに、備蓄品や資器材がどこに保管されているのかを把握しておきたい」「BCP（事業継続計画）を確認し、現状にあったものかどうか見直しておく必要がある」「今後は市と区の災害ボランティアセンターの役割分担を整理することにつなげたい」などの気づきがあり、平時からの備えの必要性を職員間で共有した。今後も訓練や研修を重ね、災害への意識を高めていく。



各所から届く情報や連絡を、模造紙に書き出して共有

訓練を通じて、「事務所内を整理整頓して、落下物などの危険を回避するとともに、備蓄品や資器材がどこに保管されているのかを把握しておきたい」「BCP（事業継続計画）を確認し、現状にあったものかどうか見直しておく必要がある」「今後は市と区の災害ボランティアセンターの役割分担を整理することにつなげたい」などの気づきがあり、平時からの備えの必要性を職員間で共有した。今後も訓練や研修を重ね、災害への意識を高めていく。

当事者・家族についての「つながり」と向き合う

1 ひきこもり等の支援について考える

社協職員座談会レポート

ひきこもりや不登校、発達障がいなど、地域には様々な社会課題があり、その多くは潜在化している。しかし、当事者やその世帯への関わり方の難しさ、つながりにくさ等から、支援が円滑に進まないことも多い。また、居場所づくりへと一足飛びに展開が進みにくく、すでに用意されている居場所になじまない人がいることも事実である。

そこで今回、「ひきこもり等の支援」をテーマにした座談会を開催し、社協として、この課題に向ける視点、立ち位置を整理し共有した。

―まず、各区社協での取り組みを教えてください。―

港区社協・荻野 見守り相談室と生活困窮者自立相談窓口の職員が、ケースで関わった人に声をかけて、月1回の「居場所づくり会議」をしています。ここでは、当事者が当事者のために「どんな居場所がいいんだろ」と考える、その場が居場所になっているという取組みです。10〜70代ぐらいまで、幅広い年代の方が参加されています。

港区社協・田中 ボランティア・市民活動センター担当としては、不登校のこともや親を支援するボランティアグループの後方支援をおこなっています。

淀川区社協・青野 「ゆっくりくるり」という居場所を、年4

回開催企画しています。ここには、制度の狭間で生きづらさを感じている65歳以下の方が集まっています。居場所をはじめたきっかけは、見守り相談室とボランティア・市民活動センターとの話し合いで、支援が必要な方の居場所がないという悩みからでした。また、ケース会議などで当事者との関わりのある関係機関の方にも参加してもらい、関係を深めてもらいたいという思いがありました。他施設で活動が難しい、サポートが必要なボランティアの方には特活を活かし、ピアノ演奏や調理をしていただきました。また、参加者には、自分のことや得意なことを伝える場を持ちました。

平野区社協・尾方 月に1度、第2土曜日の午前に「不登校・

ひきこもり親の会」、午後には「発達障がいについて話し合う会」をしています。前者は、就学中のこどもの親と、成人のひきこもり状態の人の親と、2つのグループに分かれて話し合いの場を持っています。後者は、幅広い当事者の家族と、当事者本人も参加されます。

いずれも2014年頃から継続していて、私は2019年に入職した時から担当しています。「発達の遅れ」「進学・就職」「親とのコミュニケーション」などテーマを決め、進行役を務める「サポーター」のものと、当事者・家族同士で話し合います。区外、市外・府外からの参加も多く、しかも、毎回新しい方が来てくださるので、こういう場が必要とされているの

を感じます。

―居場所づくりで大切にしていることは？―

港区社協・荻野 居場所づくり会議は、参加者が企画メンバーとして、何をやりたいか話し合うことを大切にしています。社協の駐車場にある花壇の一角を「畑」にして、「豆やいちごを作ったりしていますが、畑はあえて屋上等に作らず、活動や収穫物が人の目につきやすく、職員も声かけやすく、本人たちが自由に出入りしやすい場所になりました。

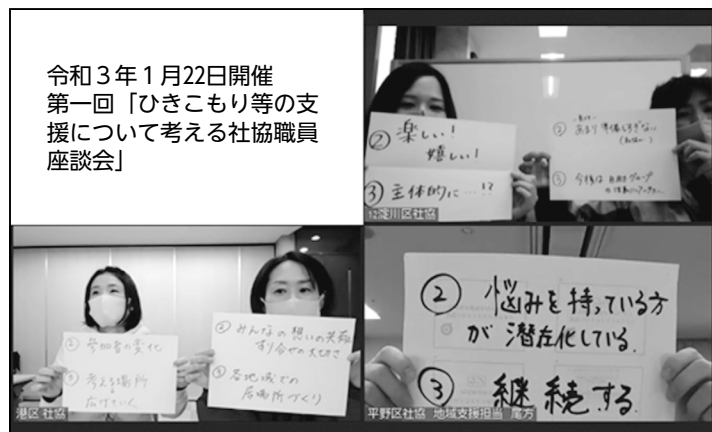
淀川区社協・青野 私たちは、一人ひとりの居心地を第一に考えています。人と関わるのが苦手な方も多いので、支援者が隣に座ることやみんなと離れて座れるスペースも作りました。ボランティアの希望者の中には、精神疾患などでサポートがないと活動が難しい方がいますが「ゆっくりくるり」でいきいきとした表情で活動したいと思っています。

平野区社協・尾方 港区や淀川区とはまた違って、問題を解決する場ではなく、参加者の悩みを共有するのが目的と捉えています。児童デイサービスの職員やピアサポーター、元参加者の

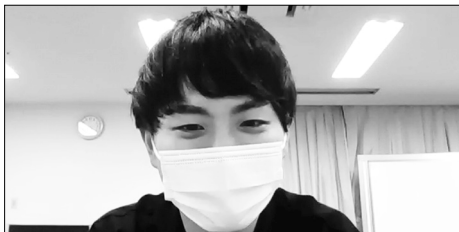
方が「サポーター」として会を進行してくださるので、参加者は悩みを話すことに集中してもらえかなと思っています。

―参加者の様子はどうですか？―

平野区社協・尾方 親の会に初めて参加された方が最初、「聴くだけでいいですか」と不安そうにおっしゃっていましたが、終了後には「次回から話ができればいい」という言葉を残して帰られました。みなさん積極的に、自分のことや今の状況を話している、その雰囲気がかつたのかもしれません。



令和3年1月22日開催
第一回「ひきこもり等の支援について考える社協職員座談会」



◆平野区社協 地域支援担当・尾方俊祐さん

- ・「不登校・ひきこもり親の会」を月1回開催
- ・「発達障がいについて話し合う会」を月1回開催



◆淀川区社協 地域支援担当・青木歩美さん(左)、見守り相談室・青野めぐみさん(右)

- ・「ゆっくりくるり」を年4回開催



◆港区社協 見守り相談室・荻野和代さん(左)、地域支援担当・田中未春さん(右)

- ・「居場所づくり会議」を月1回開催
- ・不登校の子どもや親を支援するボランティアグループの後方支援

淀川区社協・青野 職員も含めてニックネームで呼び合ったり、一緒に食事をしたりすることで、参加者とのフラットな関係ができました。精神病院退院後の日常生活のことを話す人もいれば、得意なイラストを持ってくる人もいます。支援する・

されるの壁を取り払うことで、当事者の強みや人間性をみせてもらった気がしました。

港区社協・荻野 外に出ることが苦手だった方が、定期的に社協に來所して私たちの仕事の手伝いをしてくれるようになったり、他人との関りを拒んでいた人が、今ではいるのが当たり前になり、参加者の変化には感動します。

港区社協・田中 これまでの支援者以外に、ボランティアや地域の方、他の参加者との出会いの中でおきる「化学反応」を実感しています。それと同時に、本人の「エリア」が広がっていると感じています。

淀川区社協・青木 これまで区社協では部門ごとの動きが中心でしたが、ゆっくりくるりをやっていく中で、部署を超えて一緒につくりあげることができました。ひとり思っているだけではできないことが形になっ

―場の運営は、誰とどんな風にしていますか？

て、それはとても楽しいし、嬉しかったですね。

港区社協・田中 ボランティアグループの運営支援では、みんなの思いの共有と個々の想いを常々確認し、すり合わせながら進めていくことを大切にしています。

港区社協・荻野 ボランティア担当と相談しながら、ボランティアセンターで実施している「折り紙教室」「カフェ」「バ

ルーン教室」などの居場所につなげること、新たに「その人たちのための場所」をつくることで、本人が取捨選択でき、さらにそこから先の広がりを意識しながら進めています。

平野区社協・尾方 サポーターの人たちが会を応援してくださり、区社協と一緒に会について考えてくれたり、運営を支えてくれたりしています。コロナ禍で昨年3、5月は中止しましたが、再開についてもサポーターさんに相談できて心強いです。

―みなさん自身の役割、立ち位置をどう考えますか？

平野区社協・尾方 私の役割は、事務局として、話し合いの場を継続することに尽きます。

淀川区社協・青木 今日、とくに港区の話聞いて、職員としての視点も持ちつつ、自分自身も一人の人として参加者と一緒

に楽しみながら企画を考えられたらいいなと思いました。職員だけで固めて、意見を出すことがないようにしたいですね。

港区社協・田中 場に関わる一人ひとりの考えが違う場合は、話を聞いて、道筋を立てる役割をすることで前に進むことができます。その意味では「交通整理」役だと思っています。また、参加者同士、他機関との「調整」役も社協の役割だと考えています。

―これからの方向性は？

平野区社協・尾方 やっていく中で、悩みを持っている方が潜在化していることが分かりました。新しいことをするより、今なお潜在化している人につながるよう続けていきたいです。

淀川区社協・青野 参加する当事者の主体性を引き出し、今後は、「自分たちのゆっくりくるり」だと思ってもらえるようになれば理想的です。私たちは徐々に後ろへ下がっていきたいですね。それと、参加者の本音は、わかりあえる友だちが欲しいのではないかと思います。ある時、参加者のひとりが「友だちとユニバに行きたい」とつぶやいたことが印象深く、参加者同士の関係性が生まれる居場所にしていくと思っています。

港区社協・田中 区にひとつ、

特定のテーマでの居場所を作っても、実際に参加してほしい人に参加してもらえないことがあります。不登校の子どもを支援するボランティアグループについていえば、子ども食堂などの居場所が増えている中で、「身近なところ集える場があればいいね」と、メンバーからの声もあります。それぞれの思いをすり合わせられるような、調整役になれたらと思います。

座談会を終えて

悩んだり迷ったりもするが、「楽しんでる」ことがよく伝わってきた。一人ひとりのしあわせやよろこびのために、汗をかき、寄り添い、一緒に楽しむ。つながりを持ちにくい人にとって、そんな風になれる社協職員が「つながり」そのものなのかもしれない。けれど、いつまでも職員がその役割を担い続けるわけにはいかない。だから、時に立ち止まり、周りを見渡し、考え、また前に進む。そんな社協職員の姿に、励まされた座談会でした。次号では、別の3区に参加いただいた第2回座談会の様子を掲載します。

2 できるだけ早い時期にこどもの可能性を広げたい

NPO法人み・らいず2

NPOや民間団体、当事者団体等もそれぞれのミッションや思いをもとに、取組みを積み重ねている。今号では、住之江区に本部を構え、大阪市内外で活動している「NPO法人み・らいず2」に話を聞いた。

若い力でこどもたちの未来を支える

「み・らいず2」の原点は、障がいのある男性とそのお母さんとの出会いから生まれた、「障がいのある人の暮らしをもっと豊かにしたい」という思いにある。

代表の河内崇典さんは大学生の頃、仲間たちとガイドヘルパー活動を開始し、2001年に「NPO法人み・らいず2」を



み・らいず2の前田綾子さん(左)、武井千世さん(右)

本人に合った支援があれば、今が違っていかかもしれないと思います。より早い時期に出会い、まだ将来が固まってい

ない大学生と一緒に、本人の可能性を広げ、未来に向けて一緒に成長していきたいと考えています。

出会うためにオープンした「みらい食堂」

ひきこもり・不登校に関する住之江区での事業は、10数年前から、大阪市の委託で居場所づくり「サテライト」や、大阪市の塾代助成事業を活用した学びづらさのあるこどもを対象とした個別学習支援「ラーンメイト」が行われていた。ラーンメイトは、大学生が塾講師として勉強を教え、休み時間にはこども同士の交流もある。元担当の前田綾子さんは「親御さん以外の人とつながれる環境のなかで、こどもたちは安心して勉強しています。『いい点とれたよ』とテストを持ってきてくれることもあります」。

学力向上に直結しない部分も支えることで、結果的に学力にいい影響を及ぼしている。また、み・らいず2となつてから、気になる子と「早く出会うために、2019年「みらい食堂」をオープンした。さまざまな事情で孤食になつてこどもを対象にした少人数のクローズド形式だ。ご飯を食べたら終わりではなく、大学生と一緒に、ゲームやミニ運動会、ものづくり等の文化的な経験を通してコミュニケーションを図っている。参加した高校生も、自然に手伝う側にまわっているそうだ。

担当の武井千世さんは「ご飯は、こどもたちと早く出会うための手段。食堂は、アウトリーチの場所です。ここで出会った子、その子にあった本当の支援につなげることを大事にしています」。

コロナ禍では、食堂を休止する代わりに、お弁当配達サービス「みらい弁当」を開始し、安否確認も兼ねて1カ月間、家庭に弁当を届け続けた。弁当があつたから出会えたこどももいたという。このほか、区内の中学校で月2回ひらく居場所支援も、気になる子との出会うための場所となっている。

支援関係者が力を合わせてこどもたちの環境をバジョニアップ

み・らいず2は、住之江新北島地域で、地域住民が中心となつて今年4月にオープン予定

のこども食堂立ち上げについて、相談役を務めている。「運営は、地域の方が主体となつて、我々や区の子育て支援室などは福祉の視点で食堂を訪ね、気になるお子さんに会つたら、そこから支援につなげる役ができたかと考えています」と武井さん。

近年、法人本部を置く住之江区の事業に力を入れている。枡谷副代表には思いがあつた。

「不登校やひきこもりの方が、なぜ、こういう状況におかれているのか。区内の活動に重点をおくことで、都市部の特長的な課題も見えてくる。それを解決できるモデルをつくり、広げていきたいと思っています」。

一方で、こども食堂立上げに関して、み・らいず2と地域の橋渡し役を担ってきた区社協の小出泰生さんは「NPOと地域では、それぞれのやり方があるなか、社協が通訳者となることで合意形成がスムーズになればと考えています。多職種連携の枠組みづくりを視野に入れ、引き続き後方支援をしていきます」。

相互に連携することで、こどもを支える環境がバジョニアップすることに期待したい。

次回も同テーマで特集を掲載します。

NPO法人み・らいず2
TEL. 050-5840-3113
〒559-0015
大阪府大阪市住之江区南加賀屋4丁目4-19

3年間の取組みを総括して 「第2期」推進計画へ

平成30年度から推進している「大阪市地域福祉活動推進計画」は、今年度、計画期間（3年間の最終年度を迎えている。3年間の総まとめとして、令和2年9～12月にかけて、3回にわたる評価会議（大阪市地域福祉活動推進委員会の委員4人と外部委員1人で構成）を開催した。評価は「市社協が中心になり

進める事項」（12項目）について評価シートを作成し、各取組みの到達点や残された課題、今後に向けてのポイントを整理。また、24区社協からの集約による「各区における特長的な取組み」の把握・分析結果も共有した。委員からは「社会福祉法人の取組みは、3年目はコロナの影響によりなかなか動けず、元

何かができると勇気づけられたが、まだまだ時間がかかる」「多様な居場所」といつても、こども、高齢者など、比較取的取り組みやすく、広げやすい取組みが多いため、そこからこぼれ落ちてしまうところへの展開にも期待したい」、取組みによつては「3年間にわたって段階的に動きをつくってきたからこそ見えてきた新たな課題もある」など意見が交わされた。

しい。冊子『コロナの中でもつながる方法』にはこの状況でも

並行して令和2年11月27日に開催された第42回大阪市地域福祉活動推進委員会では、第2期



オンライン併用で開催された令和2年度第2回評価会議（10月）



第42回大阪市地域福祉活動推進委員会（11月）

計画策定の進捗状況を報告。評価会議の経過を共有しながら、市社協・各区社協の事業といかに関連していくかを中心に議論した。

2019年度に全国の児童相談所が対応した児童虐待対応件数は、19万3780件（速報値）と過去最多となった。中でも、面前DVを含む「心理的虐待」が約11万件に及ぶ。「86万ショック」と言われるように、出生数が減り続けているわが国において、なぜ子どもを大切に育てる環境が用意されないのだろうか。2020年9月にユニセフが発表した「レポートカード16」※は、先進国における子どもたちの幸福度を示した報告書である。レポートでは、子どもたちの精神的・身体的健康と学力・社会的スキルについて分析され、日本は総合順位20位（38カ国中）という結果であった。身体的健康度は1位でありながら、精神的健康度は37位であり、自殺率の高さや「生活に満足している」と応えた子どもの数が最も少ない国のひとつである。数学や読解力等の学力面ではトップ5に入る一方、社会的スキルでは「すぐに友だちが

風をよむ

「日本の子どもの幸福度」を
子どもの訴えとして捉える必要性

大阪市立大学大学院生活科学研究科 特任准教授

中島 尚美

できる」と応えた子どもの割合が最下位に近かった。さらに社会的状況の分析では「困ったときに頼れる人がいる」と応えた割合が最下位であった。

何をもって幸福と捉えるのかは議論の余地があるが、少なくとも日本の子どもたちの状況は、心身のバランスを欠いた不安定さと孤独傾向のなかにあることが窺える。このレポートの結果自体が、子どもの悲痛な訴えであると捉えるべきではないだろうか。

本レポートの指摘では、幸福度をはかる指標が日本はまだ不足しているとされている。地域の子どもの遊び場や外遊びの割合、子どもの環境としての大人のワークライフバランスに関するものなど、まずは客観的なデータを揃えることから取り組む必要がある。そしてその中で十分な部分を社会の構造に反映させていくことが急務である。

※参考：<https://www.unicef.or.jp/report/20200902.html>

こんなこと 私たちの施設から 35 やってます!

こころのんきに、からだ元気に!



社会福祉法人スワンなにわは、地域住民、自治体、各団体の協力のもと、地域住民のニーズを把握し今後の社会事業などを考え、1996年6月26日に産声を上げ、在宅サービスを中心に高齢者、障がい者福祉事業を行ってまいりました。現在は第3代理事長樋口恵光氏により、従業員数80人(2021年1月現在)で事業を行っています。

「誠意・信頼・感謝」あなたを想うその気持ち、何かに気付くその心、私たちスワンなにわの宝です。この言葉を法人理念とし、地域住民の高齢者、障がい者(児)、子供など、社会的弱者と言われる方々に対し慈愛の心で接し、人と人との関りを大切にすることで、社会的差別を無くす。一人ひとりの人権を尊重することを常に念頭に置き、当事者が自立した生活を送



中はとても広く、設備も充実しています!

れるようなケア及び支援を行っています。

高齢者福祉事業拠点では、地域密着型としては近郊で唯一の認知症対応型通所介護事業デイサービスセンター「ひなた」は浪速地域ネットワーク事務所やボランティアさんとの絆も強く和気あいあいと運営されております。また、24時間支援スタッフがお手伝いする有料老人ホーム「豆の希」のほとんどの居住者の方は、自分なりに明るく生き生きと楽しく生活されております。居宅介護支援事業所、ホームヘルプステーションも併設されている他、大阪市から委託を受けた高齢者の総合相談窓口「浪速ランチ」も設置されており、ワンストップで高齢者ご本人や家族さん方のお困りごとに対応可能です。

障がい者福祉事業拠点では、生活介護事業としてのデイケアセンター「夢の希」、放課後等デイサービス・児童発達支援事業「ゆめっち」、就労継続支援B型事業「パン工房ドリーム」の他、生活・就労に関する様々な相談に対応可能な「スワンなにわ相談支援センター」も併設されております。

住所 〒556-0026
大阪市浪速区浪速西2-11-6
電話 06-6562-0456
HP <http://care-net.biz/27/swan/>

「行政書士によるリモート(テレビ電話)でつなぐ無料相談会」 ～そうだ、行政書士に相談しよう!～

大阪府行政書士会では新型コロナウイルス感染症の心配がない、インターネットや電話による、相談、遺言、後見などの困りごと無料相談会を開催します。詳細は、大阪府行政書士会ホームページまで。

〇日 時: 令和3年2月22日(月) 10時～16時(原則予約制)

〇相談方法: ①相談者の通信端末(携帯電話・スマートフォン・パソコンなど)によるリモート接続(電話又はZoomのいずれか)

②府下14か所のサテライト会場からのリモート接続

〇ご予約・お問い合わせ: 大阪府行政書士会事務局

06-6943-7501

〇申込締切: 令和3年2月18日(木) 17時



立ちどまらない保険。

MS&AD 三井住友海上

三井住友海上の安心



www.ms-ins.com

■令和3年度(2021年度)赤い羽根共同募金記念バッジデザインを募集

令和3年度共同募金運動期間中に、募金運動に協力した方へのお礼や赤い羽根共同募金をPRするためなどに用いる記念バッジのデザインを、近畿6府県の共同募金会が合同募集します。

◎デザインのきまり

- 赤い羽根共同募金のイメージに合った作品であること
- 「赤い羽根」と「西暦」もしくは「和暦」が入っていること
- 「赤い羽根」の赤色を含め、概ね3色(グラデーション不可)で構成されていること
- ピンバッジの実寸(たて・よこ約25mm)でも分かりやすいデザインであること
- 未発表のオリジナル作品で、他者の知的所有権を侵害していない作品であること

◎応募資格: 近畿6府県(滋賀県・京都府・大阪府・兵庫県・奈良県・和歌山県)内に在住 または在勤・在学の方

◎締 切: 令和3年4月15日(木) 必着

■令和3年度公益財団法人中央競馬馬主社会福祉財団助成要望書受付のお知らせ

大阪府共同募金会では、一般社団法人京都馬主協会を通じて行う標記財団の助成金に係る助成要望書を受付けます。

受付期間=令和3年3月1日(月)～3月31日(水)(必着)

助成対象=民間社会福祉施設整備費

一定条件が必要ですので、詳しくは、大阪府共同募金会ホームページ <http://www.akaihane-osaka.or.jp>をご覧ください。

問合せ=大阪府共同募金会事務局まで ☎06-6762-8717

共通

赤い羽根おさか

検索